

昭和二十一年十二月三十五日 印刷納本
昭和二十一年十二月一日 發行

報恩

第一卷 第四號

拾貳月號

發行所

報恩會青年部

拾貳月號 目次

武田彌三先生近影	一
新法發布に際して我等の覚悟	二
実行第一の修養	四
道徳教育の重要性	五
報恩會青年部試	六
實地應答集	七
青年の聲	八
青年文藝室	九
修養の診察室	一〇
編輯後記	一一
報恩會名譽顧問 武田彌三先生	一二



武田彌三先生近影

武田彌三先生を中心とする
 修養に依り心身を練磨し
 報恩會員相互の親睦を畫る
 を以て目的とす

報恩會青年部

卷 頭 言



人間、生れては死ぬ迄必ず生きなければならぬ。生きて行く上には誰しも悪の中に於けるよりも本来善の中にこそ幸福と云ふ安住地を見るであらう。

初に人間の性は善であつた。

善の中に幸福といふ安住の地を求めることは既に忘れられた人間の本性に歸る事であり己にかへることである。

人間の本性にかへる爲には自らを正しく眺めることの出来る努力がなければならぬ。

修養はその努力を指して言ふものであり、物事をよりよくする爲に工夫するその努力とも言はれるものであらう。

此の意味においてそれは日々の生活と離れたものではないのである。

人間の本性にかへることは即ち眞の日本國民にかへる事の又の名前でなければならぬ。

人間が幸福を求めるところがこゝに於て生活の中にある修養そのものに見出されるのである。

我々はこの正しい生活を生きんが爲に、強い意志と實踐の持續を保つ爲に本誌を借りて折角人間の問答を続けさせて戴くのである。

(編輯部)

自らを反りみざりしこのごろをふさやみつきて思ふことの多し 正規

野芝居の獅子舞 ことにおもしろくまじろぎもせず吾兒は見しどぞ

新憲法御發布に際して我等の覺悟

名譽顧問 武田彌三先生述



見渡す限り黄金の波を打つ、秋を迎へました。私共は之を見て、非常に喜びに耐へません。敗戦と云ふ事に依り、私共は目覺める「時」を神様から授かつたのです。日本國民全部が悪かつた爲めに敗けたのであります。そして今、其の悪かつた事に對する、國

民の反省の一端が、即ち「申し譯なかつた」、と云ふ氣持が神様に通じて、今こうした黄金の秋を迎へる事が出來たのであります。

或る人が、梨の植えてあつた地に、その梨の木を掘つて稻を植えました。然し、同じ様に手入れをしても、元々稻の地であつた所と比較すると、その出來高は悪いのです。そこでそれは一体如何した譯であらうと、私に尋ねに來ました。私は「それは感

謝の氣持が足りないからだ」と答へました。それから其の人は、その事を深く心に刻みそれ以後唯御詫びをする生活を續けました。その結果はどうでせう。昨年出來の悪かつた稻が倍以上にも取れる様になりました。斯くの如く人の眞心が、天に通ずる時に物事は上手に行くのです。之れが「天は自ら助くる者を助く」と云ふことであります。此の事からしても、日本人が、自分の租國に對して「相濟まん」と云ふ眞心が、神様に通じ、又神様もそれを、御受取になつたが爲に此の様な豊年型の秋が來たのであります。私共は進駐軍より、色々の援助を受けて居ります。又、將來も援助をするに云はれて居ります、それに依り私共は滿腹感を得ることが出來ます。私共は、此處で「有難い」と云ふ、氣持が現はれ、そして一つの安心感を保つ事が出來ます。故に唯、援助を受けてゐると云ふ事のみに留まつたり、又怠けてはいけません。私共は此の恩に報ゆる爲に、努力せねばなりません。

全世界が認め、又全世界の平相の基である、新日本國憲法が、今度發布されました。

私共八千万の同胞は、それを呑込み實行せねばなりません。

天皇陛下も、實行の爲に國民と共に努力する、と仰せられて居ります。私共は間違ひない様に努力せねばなりません。自分の者として努力せねば、それは空想であり、何にもありません。世界の人は「よく出来た、要は守る事である」と、云つて居ります。日本人の悪い癖は、最初の中は仲々立派であるが、それが長続きしない云ふ事です。日本共は、少くとも報恩會の會員は眞の日本人となつて、何處迄も、新平和國家建設の爲に努力せねばなりません。そして世界に貢獻せねばなりません。此の憲法は實際化せねばなりません。私共は、大きく教へられ、小さ行動するのです。往々人は、表看板を掲げる事はしますが、その看板を金看板にする事は出来ません。小林法蓮先生は「表看板を掲げるよりも、それよりも充實した事を行へ」別言すれば「不言實行しろ」と繰返し々々云はれました。結局、吾々は、各自責任を感じ、實行するにしかず、と云ふ事でありませぬ。

先般 天皇陛下が、關西に行幸なされました。國民は「吾等の天皇だ」と、喜びに満ちて、御迎へ申し上げました。感激と、喜びの氣持があれば、御迎へ申げることの、服装は如何でもよいか、如何でもよいのでありますが、そこには禮儀と云ふものがなくてはなりません。此の御迎へする數多い人の中で、特に異彩を放つたのは進駐軍のMPの方々でありました。

陛下御到着の時刻が迫るや、誰からも云はれずに、洋服の埃を拂ひ、帽子を直し、自發的にきちんとして、立派な軍人として、陛下を御迎へ申し上げました。異國の人が此の様な態度であるのに、日本人は、喜びの氣持は大いにあつたのでありますが、禮儀を正さうとした者は、殆んど有りませんでした。之は今迄の教旨が此様にしたのであります。何も命令されなければ、それでよいと云ふ考へ方でありませぬ。MPの方々は、自分は、米國を代表した軍人である云ふ、考へ方から、かゝ態度をするので、之は徹底した個人主義教育の表はれであります。

禮にせり、禮に終るのであります。私共は禮あるが故に、自分自身、人間として認めてゐるのであります。然し、其れに相應しい、行動が伴はないのであります。互ひは人である、と云ふ事を自覺せねばなりません。今迄は唯單に話を聞くのみでありました。小林法蓮先生は、實行不可能な言、實行困難な言は絶対に云はれて居りません。故に御互に自覺し、言葉で現はした事が、後には直に行動になる様にせねばなりません。之が「言行一致」と言ふ事であります。自分の手許は如何であらうが、己を省みて、己を改善し、日本建設を、自己の心に命じ、そして實行せねばならないのであります。

私共は、よく自分の考へ方を考へねばなりません。如何なる人でも、自己主義の癖は持つて居るのであります。私共は、自分の喜びが主であるか、又他人を喜ばす事が主であるか、をよく考へねばなりません。父親、母親が苦しく、又つらひ境遇にある時、自分の子供には、此様な苦しみ、つらさはさせたくない、云つて頑張ります。此の氣持を稱して「人心」「人情」と云ふのであります。

修養に理屈は禁物であります。今日と昨日、又明日、とは凡ての点で、大變な違ひがあるのであります。

小林法蓮先生の言はれた事は「文句を云はずに喜んで働け」と云ふ事に盡き、又、その事が一切を解決する事なのであります。私共は此の、不平、不満、自惚を早く取拂ふ爲に修養をするのであります。

裸になつた日本、そして其處に住む日本人、私共が裸になる事は當然であります。新憲法が發布になり、過去の古い日本は、悉く捨て去り、新日本建設の爲に、新憲法の下で努力せねばなりません。

新日本を建設する爲に、八千萬の同胞は、一人として不必要な人は居りません。八千萬同胞の、全部の健康が伴はねば、それは丁度、人の体の一部分に刺が立つたのと同じであります。私共は健康で、そして眞心をこめて、努力せねばなりません。

實行第一の修養

武田彌三先生述

新憲法が發布され日本人の行方が明瞭となりました。各々の責任に於て憲法を實行し、目的は此の日本が唯一つ世界で防備なき平和な國民に成る事でありませう。



「夫れ國は法に依つて榮え、法は人に依つて尊し」

立派な憲法が出来其の憲法を正しく運用する、死物の條文では駄目でありませう、要は自分の心の持方である。心持の如何に依つてはどんな事でも出来るのです。互に自分の氣持が運用出来るやうになつて、然る後國家を運用出来るやうになるのでありませう、一人々々が日本國の代表で、一人々々の心に依つて國の盛衰があるのです。ごん

な立派な規則を作つても、其れが守らなければ何もありません。

早起をしようと思つて、二三日續いたがごうも眠むいから止めた。水をかむつて行をしてみたがごうも寒い。斯の如く表看板をいくら作つても、言ふ可くして行が伴はなければなんにもなりません。

先頃も銚子の講演會で、一婦人が女の子を抱いて來て、この子が頭の毛が全然なかつた禿頭病であらゆる手當を盡したが、其の効なく、母の弟は醫學博士であり、努力研究したが、「運が良ければ毛が生えてくるかも知れない」といふ結論だつた。たまたま報恩會の話聞き、「夫を怨み、姑を怨み、多忙なため子供の出來るのを制限した、斯うした事が原因で意見となつた」事を教へられ、言はれるまゝに家に歸つて話した。そうして唯御詫より外に道はない、神に、先祖に、親に、夫に子供にも詫び通して、日常生活に於ても、「目につくやうな事がありましたらごしく、言つて下さい。私を良く洗ひ上げて下さい」と頼んで、努力し始めた結果毛が生えてきたのでした。全く

有難い此の氣持より何もなかつたのです。この子があればこそ斯うした話も聞かれたんだ。一八〇度の轉換したこの氣持が、五年前に來たときのヤカン頭が、ふさくとしてゐたのでした。

斯の如く日本中の人が元氣で明朗である事を望みます。

世界中唯一つ無防備な國でありながら、安心して暮して行ける國にしたい、現在の日本は開け放しの國であり、總て何んにもない國であり、そういふものを必要としない國にたゞき上げたいのです。現在の國內は各々の氣持が腐つて居て、闇屋があり、闇商人、惡質ブローカーがあつて、悪い事をしながら金を貯め、正直者は損をする。これが現在の姿であります。このまゝ、放任しておけば國は亡びてしまいます。でありますから、國民の總意によりこれを正しくしてゆかねばならない、一人々々が自分勝手な氣持を捨て、一家の和を圖り、心を圓滿にして、喜んで明るく働き感謝の生活をしてゆく、その努力の結果が、間違つた心を、道によつて正しくしてもらつた、お互の心

の持方でどういふ様にもなつてゆくのです。人の心持程おそろしいものはなく、人の心程尊いものはなく、人の心程つかまへごころのないものはない。

眞に人と成るべく努力することです。先年は一千万の人が餓死すると言はれた。しかし進駐軍の管理の下に餓死者も出ずに、今日まで過させてもらい、お互は感謝して働きました。今年には農家の人もほんとうに良く出來たと、事實を告白して感謝してゐます。

斯うした結果が二合五勺の配給となり、安心して働き喜んで働けるのです。自分が求めたものが満たされると嬉しくなり、求め方が多いと満たされなくなる。世の中で苦勞する程尊いものはない、修養とはつらい事をなすのである。つらい事は買つてもやる、苦しいのは當然であり、甘んじてその苦しみに當る、苦しみがなくなつてしまつた事は死であります、死ぬときに安心して死ぬ様努力してゆくことです。苦しみがあるときは死はないのです。毛が出たのも死んだのも修養が出來たからであり、苦

報恩會青年部報（其の一）

報恩會青年部第一回討論會議事決定事項

議題及び決議

一、報恩會青年部圖書部設置の件（西部提出）

圖書部設置に關しては全員一致可決

圖書閱覽場所方法及び入手方法等は委員會を設け具体案を作成することに決定

二、雜誌「報恩」に就いて説明を求め（中部提出）

今回結成された報恩會青年部は、愛知縣、朝日青年修養會が其の先驅となつて居たこと、従つて同會にて發行されて居つた修養雜誌を報恩會青年部發行雜誌「報恩」として發行したことを、報恩會本部發行の雜誌「報恩」と合併



して發行せよとの聲もあつたが之は青年部は青年部として獨力でやつて見よとの秘書長の御意見もあり將來の發展を期して單獨發行をしたものである。原稿等に關しては雜誌裏に記載してあるので参照されたい

三、地域別青年部討論會開催の件（中部）

多數決に依り可決

四、報恩會青年部今後の進み方に就いて（東部提出）

(イ) 會員を増すことに努力すること

(ロ) 青年部今後の進み方に就いての具体案を作成すること

五、報恩會青年部會費徴收の件（青年部長提出）

青年部規約、第五條第一の會員の件左の通り決定す

青年部會費一ヶ月參圓也とす

本部會費、青年部會費二口を納めるも、青年部會費一口を納めるも會員の自由とす

尙、他に賛助費も會計に繰入れる

報恩會青年部報 (其の二)

報恩會青年部第二回討論會議事決定事項

議題及び決議

一、雜誌の今後の計畫(湘南)

現在五百部作製して居るも紙の補充さへつけば問題なし

二、質疑應答集の編輯に就いて(三河)

(イ) 先生の講演當日各自感激した事を記録して編輯部へ原稿送附すること

(ロ) 各自の体験、入會の動機等の投稿をすること

三、青年部信條項目作成の件(中部)

(イ) 「我等は眞の日本國民に成り切りませう」を主眼とすること

(ロ) 各支部で募集の形で集め、來十二月九日迄に提出一應作成し、其の後、日時に

余裕を置いて徐々に完成すること(出來得れば今年中位)

四、討論會の名稱如何(中部、湘南)

來月迄再検討のこと

五、青年部歌作製の件(中部)

今年中に各自研究して提出(作曲は出來得れば部員中より)のこと

六、腕章作成の件(中部)

全員一致可決、行幸の時は努めて使用すること

七、ミカンの皮蒐集の件(中部)

全員一致可決

八、青年部員年齢制限の件(中部)

年齢に依り考へが異なるから制限の必要ありとの意見もありしが、當分の間年齢は制限せず、確固たる青年部にしてから制限することに決定

九、宮城勤勞奉仕の件（三河）

役員にて研究すること

十、復員、引揚者列車の湯茶奉仕の件（中部）

各支部に於て出來得る範圍に於て實行の事

十一、女子部の發展方法（三河）

保留（女子部長を選出しては如何との意見あり）

十二、青年部貯金の件（本部）

一ヶ月十圓以上、各支部にて方法は研究、實行すること

主旨——現在の政府政策による物價安定、インフレ防止の一助と貯蓄心を身につけることに在り

十三、圖書委員選出に就いて（湘南）

役員に一任

十四、役員設置の件（幹事を各地区に設置）

秘書長推薦となつて居るも唯形式的に此の様に成つて居るのであつて事實は各支部より申出に依り秘書長が推薦して居る故適任者があれば申出られたし

十五、ゼネストの是非と吾々青年部員の立場に就いて（湘南）

諸氏の説明あつて解決

十六、議案の事前交換（東部）

保留

十七、討論會を出卓會議式にしては如何（東部）

(イ) 次回より各支部毎に代表二、三名選出討論會に出席すること（女子部員も努めて出席のこと）

(ロ) 發言權は青年部員總てにあり

質疑應答集抄



(中年の婦人) 此の方は先生の有意義な御話を或る會員より聞かれました

問「嫁いて十年になりますが、未だに子供が授かりません

今は過去に於て色々不平不満を抱いてゐた事に對し悪かつたご後悔して居りますか」

答「一度も子供を産んだ事がないですか」

婦人「一度流産をした事があります」と答へる

答「貴女は子供が出来ない體ではありません。又現在自分の悪い事によく氣が付いてゐます。人は不平不満を抱く事が最も悪い。貴女は人妻であるならば、夫の喜ぶ様にするのが妻の務めであり又妻の努力如何で、夫は喜び日々楽しく暮す事が出

来る様になります。日々を感謝して、暮す様に貴女の心を入替え、夫の爲に努力する様にしなさい。すれば子供は授かります」と優しく御教へ下さる

老婦人問「どうも御腹の具合が悪いのですが私の心に何か誤りがあるでせうか」

答「貴女は愚痴が多すぎる、又慾が深過ぎるからである。そして自分は至らないのに、良い事のみを望み、取入れる事は知つても出す事は知らない。その様な人になるのだよ」と温顔で眺められた。

問「右の足首が、歩き出すと痛のでありますが如何してでせうか」と尋ねる老婆に答「貴女は物事を、色々苦にし過ぎる。貴女は子供や孫がありますか」

老婆「はいあります」と答へたのに對し

答「子供や、孫の事を心配し、世話をやき過ぎる。老人は子供に従つてゐればよいのです、それを改めなさい

問「入院中の夫の側に十日附添つて居りましたが、その間中ひどい下痢で、

未だに同じ状態でありますが……」と尋ねる婦人に

答「それは貴女に對するよい御教へだと思つて、有難く思ひなさい。今迄は他人の者

に厄介をかけ世話をしなさい。故にその恩返しに、自分がうんと世話をさせて戴くのだと云ふ様に有難いと思つて世話を喜んで上げてきなさい。」

と教へられ更に下痢を癒す方法に就いて、一同に向ひ「鮎を酢味噌にして食べるか、又鮎の焼いたのを煮て、その汁を飲むかすれば下痢は癒る」と御親切に御教へ下さる。

問「三つになる子供の耳に腫物が出来、それが癒りそうもなくひどいのですが」(中年の婦人)

答「貴女は夫に對して不平を云つてゐるからです。」そして「未だ夫が復員して來ない事を愚圖々々云つてゐるからです。それを改めなさい」

(東 部) 松 原 成 一 記

問「風を引いて一ヶ月位すつかり致しませんがどうした心得違ひでせう」

先生「藥を服んだか」

壯年「服みません」

先生「腹が空つても飯を食へずに修養すれば腹が一杯になるか」

壯年「解らせて戴きました有難う御座りました」

問「私は親や子姑に充分な務めが出来ないので家庭の不和を生じ子供と共に死のうさ幾度か決心致しましたが四つになる子供が母さん死ぬのはいやだと言ふのに引かされて苦しんで居りますが如何致したら宜しいですか」

先生「死ぬ命を掛けて親や子姑に使へる以上總てなんでも出来るぞ、世間では鬼婆々と言ふ人に仕へて三年間

佛にも勝る方とも知らずして

鬼婆々なりど人は言ふらん

喜んでやつてくやり抜いた人もある」

若人妻「有難う御座りました」

新スタートを切つて更生の生氣が充満し有難い修養の一時でした。

青年部員

中野傳兵衛

松田 實 記

△ 寸 言 録 ▽

(其の四)

「至難と言ふのは不可能といふ事では無い」理屈はそうだが實際問題になると出来な
いと言ふ人は生活の中に修養を活かす事を体得出来て居ないからだと思ふ。

「不求得苦」復員、引揚の同胞が現在世相に即した心の據り處を求めんとして求め得

られず苦しむ無爲に過される方が多い。この方々に報恩精神を照會し導くのが報恩
會青年部員の努である。

◎「らしくあれ」

主人は主人らしく、妻は妻らしく、女は女らしくあることが各々其の本分を完ふす
る所以であり、修養の根本である。この心を持つて居れば家庭は圓滿に治まり、明
朗な生活が出来ると思ふ。

◎「百千の寶に勝る身の寶」心の寶いや勝りけり」

物質の寶は儂いものだ。これに比べたら体の健康なことは余程幸福だ。この肉体の
健康を保持し、増進する糧は健全な精神である。子孫の爲に美田を買ふ必要はない
が、心の美田を遺すことは絶対に必要だ。

青年の聲



青年部員（西部）大脇かなる

私は今日本を讀んで理屈を知つただけでなにもなつて居ませんでした。父母、弟様達に良い人になつてもらひ度いと願つて自認はあてにならない。他人のこと許り良く見えて自分だけは詰らないものだと思ひ込んで居た。これは嫌のすることが家の中を悪くしたり、自分自身病氣に成ると言ふことは何回も体験した。私がおどなしい娘に成つて居れば家中が圓滿である様に見えるが自分だけは不自由な体であるから詰らないなあ、といふ氣持ちに成ります。耳が不自由ですから 武田先生始め各先生方に教へられた通り、本に書いてある通りに考へます。本を讀んでも先生は何時も夫婦を基準としてお話しに成るから親が守つて子

に教へて行くこと云ふのが道だと考へて居た。先生のお話しを聞いて、だん／＼と間違ひであつたことに氣付いて、私が折にふれて話すことを父母弟様達は何時も馬鹿にして相手にしない。娘であり、姉である私の口を封ずることをなさいます。私の意見は何も聞いては呉れません。このことは昨年四月に 武田先生から父母様へ御注意して戴いたが私が無理に求めて注意してもらつたのですから、駄目だつたことに後で氣付き、間違つて居たと反省した。御話しを聞きに行く時でも、何時も私が御願ひして聞いてもらつて居た。求めて聞いてもらふことは駄目です。間違ひだといふことに氣付いたから私は父母弟様達に御詫ひしました。これから 武田先生の御話しを無理に聞いて戴かなくても良い、御聞きしたいといふ氣持ちがあれば聞いて下さいと申上げました。

小原部長さんから先日私に「貴女が一番始めに先生の御話しを聞いたのだから、實行して他の人達に御手本を示さなければ駄目です」と申され、其の時に本を良く御讀

みなさいとも言はれました。家に歸つて本を讀んだらば「報恩」の第三號に「或る日の道場講演記」の一節が私の頭にピンと來た。質疑應答集の一節も良かった。この記事を讀ませてもらつた。自分は今迄高い所に居りましたのが一べんに突き落されて仕舞ひました。間違つて居りました。自分では良いつもりに思ひ込んで居たことが次から次へと横道にそれてしまつて居たのでした。これから又やりなほしです。

自分の間違ひだといふことに氣付いて見ると父母弟様達が私に對して、私のいふことを馬鹿にして呉れたり、夫婦喧嘩をなさるといふ様なことが有難いものに見えました。これからは相手のすることが無理だと思つても私はたまつてついて行きます。相手が私を理解して下さるまで。

小原部長さんは私に御手本を見せねば駄目だと申されましたが御手本を示すにはどの様なことをすれば良いのか私には分りません。教へて下さい。「報恩」に依つて私の間違を氣付かせて戴きました。武田先生始め、先生の御講演を速記して下さい。

した方々、實に有難う御座居ました。御禮申し上げます。

(註)

武田先生より次の様に御答へを戴きました。

御手本を示すには、父母の言はれることを理屈抜きで只はいく／＼と聞くことです。明るく、楽しく。

(西部) 柴田 經三

私は自分から進んでこの道を求めたのではない。父より「お前の様な、己惚の強い強情者は、武田先生の御教へを受けてみつもり心を磨き更生さして戴かなければ到底人間にはなれないぞ」と強く訓戒され、まあ聞いてみよう位で毎月送られた雑誌も讀んだりやめたり、「親父はよく小言ばかり言ふ、俺はもう子供でもあるまいし、孝道が如何だの、物の言ひ方が悪いの、日本人の道とは如何だの等と言はれなくても解つてゐるよ、修養々々も堅いことばかり言つてゐては暮せるものか」とてんで自分の至

らないことを何等反省することもなく、うるさく感じ口先返事で意にも介せず、講演會や座談會に出席さへすれば親父の機嫌がよいから位で拜聴してゐた。

ところが教への道を聞いてゐると、父が小言を繰返し母が勝手なことを言つても、何んでもはいく御無理御もつともで、「お前が親の言付をきかぬから、強情だから病氣になるのだ、だからお前の子供が病氣するのだ、お前の心が悪い、この親不孝奴馬鹿野郎」と先生のお叱りを受ける。「心を改め素直になれば、病氣快癒家庭圓滿なるものだ、解つたか」とくる。「はい解りました」と御答へして家に歸ると、どうもそんな譯にはいかない、俺が如何に素直にしても妹はすぐ文句をいふ、父はやはり小言の連続でわからずや、母は勝手主義、やつぱり同じことだ、俺が教への道を實踐しても相手が改めなければ駄目だ、先生の申されることはこおつけど、何んでもかんでも自分が悪いではどうしても修養の道はうなづけられない。たしかに拜聴してゐるときは、成程と解つたつもりだが、後でどうも矛盾が出てくるのであつた。

然し三回四回と先生の教へを拜聴し、親子の道、夫婦の道、人の人たる道、そして日本人たる根本道を説かる、先生の偉大さにひきつけられ、諄々懇篤なる熱血の進りは、私如き者をして、その肺腑を剝られる思ひがし、道は斯くなるものか、省みて己の餘りにも至らざる点、悔俊のこと多きに呵責の念にかりたてられるのでした。

私は道を聞いて道を行はず、どこまで根情曲りであつたかといふ自己を反省する様になりました。まだく俺の根性は直つて居らない、更めてゐない、素直で感謝を持つて、明るく正しい人間の道を踏み行はねばならない、斷じて具現實行せねばならないと悟らして戴いた。

そうなるご氣持が愉快で家庭が明るく、父母や妹が何事によらず解つて下さる様で、妻や子供が一層いとしく愛らしく感じる様になつて來ました。

ところが追々修養の道が解つて來たが、座談會で講演會で又は道場で、尊い皆様の御体験を御聞きしたり、自然の道に反した恐ろしい結果やこれ等更生轉化の實體をみて

この心掛は悪いから更めます、こんな事では將來が恐ろしいから止めます、何でもはい／＼と素直にやれば明るくなるから、聞いたり見たりで悪いからよいから行ひますでは済まされなくなつた。心の奥底から自然と湧き出た發路が、教への道修養の道になつた日常を送らして戴きたい、人生を生きたいにしたいと思ふ様になつたのが最近である。

修養の道はもつと高い尊い深遠な即ち、悟道があるのだらう、それを掴みたい、體したい、否それなくては教への道はなりたつないのだ、物事は心得違ひによりこうなるものか、心の持方により斯くの如き結果となるものか、人間の道はこうだ、日本人としてかく生きねばならないと言ふことはたしかに解らして戴いた。それには自分はあまりにもみじめな、いたらない身だ、何んて情けないことだ、先生の御教へをそのまますつぱり心底に戴ききれないものか、たしかに戴いたつもりだが何かそのことが包裝されたまゝ腹に入つてゐる様だ、こんな包裝なしの正真正銘の中味を心ゆくまで戴

ききれないのか、誠心からなる道に活きたいものだと、修養に對する情操と云ふのか活路を求めてやまないのである。

(中部) 藤池道子

私は兄の病氣を醫者より見放され、暗い日を送つて居りました頃、友人よりこのお話を聞きまして始めて十月五日夜、加藤修先生のお話しを伺ひまして、人は心の修養如何によつて善悪は必ず生じるのだと云ふ尊い御教に、お話を伺ひつゝ、自然と涙が流れどうする事も出来ませんでした。

私は我儘で、理想の高い大馬鹿者でした、それこそ、あのまゝで、何も知らずに思ひのまゝ進んで行つたなら、どんな目に會ふかわからない私でした、兄は帝大二年の十二月學徒出陣、教育中途で肋膜炎で倒れまして病院に入りまして五ヶ月、まだ治りきれぬうちに、現役免除で二十年二月に歸つてまいりました、その間一年有餘ふらくして居りました。長い病氣故、自分の体が思ふ様に行かないので、じれて憂鬱な毎日

でした。

私とは、兄弟中一番良く、似て居りましたが、意見が、悉く會はず、私は剛情で兄との仲がうまく行かず兄に反對する日々が續きました。六月頃には調子良く、この分では、九月には上京出来るよと云ひ、自由になれぬ身でノートを寫し、勉強もしました、病人は、學校の事が氣になるので、じれるし、それこそ暗黒の世界でした。

醫者には、再起不可能を宣告され、毎日光明を絶したそれこそ死の生活と申してもよい日々でした、この時、加藤先生のお話を伺ひ、助膜は、兄弟の仲の悪いのに多いと云うたまはり、貴女は妹であるのですから、兄にいまゝでの罪をお詫びしなければいけないと云はれ、よく今までの悪いことがわかり、心の奥底より泣いてしまひました、その夜、兄の病床に伺ひましたが十時半、涙ながらに今までの罪をお詫びしました。

兄が其の時「此の頃お前が一生懸命で働いてゐるのを見て、うれしく思ふ」と云ひ、

喜んで許して頂きました、これより私の心の反省の日々が續きました。それこそ生死もわからぬ病人のお世話に、不思議と心が明るくなり、毎日がたのしく立働く事が出来ました。何事につけ感謝と、すまない氣持とで一杯でした。

十日よりの道場のお話を伺ひに、十四日に参りまして、先生の尊い御教に涙を流して伺つて居りますと、塩田さんよりの手紙で、兄に急變ありすぐ來いとの報に接し、加藤先生の御力のお言葉に元氣づけられ、不思議と心は静かでした、お話の爲と有難く思つて居ります。

家につくと母が今注射をしましたので、正氣になつた事を聞かしまして、兄の病床に伺ひ、お兄さん、如何と伺ひ、足の方に坐りました、その時、おゝ「道子」か、もつとこつちへ來いと云はれ、頭の方に参りました、お前が一生懸命で僕の爲に働いてくれるがもう少し頑張つて來れよと力なく、やさしく云はれ「お兄さん、いまゝで私もお兄さんにさからつて悪かつた御免なさいね」と詫びますと、兄が「僕も今ままで無

理ばかり云つて悪かつたゆるして來れよ」と力のない、あの聲、生氣のない、死の目
前の眼をして云はれました。

僕が死んでも、生きても素直なよい娘になつて呉れよと、これが最後の言葉でした、
あゝ死んでしまはれたのだ、呼べど應へず……

死、遂に恐るべきものが來てしまつた、あゝ永遠の別れ……、人生に於て最も悲
哀な死です。

兄は死ぬ朝まで、いな息を引き取る數分前まで、どこまでも治る希望を捨てずに、本
を注文しつゝ、靜かに、靜かに此の世を去りました、何事も許し合ひつゝ、うらます
立派な／＼な最後でした。兄が身を持つて私の心を、人間らしく、正しい道に歩ませ
て下さつた事を思ひ生命がけで、今後御修養させて頂く覺悟です。

(湘南部) 入野米一

私共の修養は、坊主臭い、耳障りなこの言葉から感ずるものとは大いに違ひます。

差支のない酒なら大いに飲み、大いに喧ぎ、腹の皮がよおれる程笑ひ合ひます。働
く時はキビ／＼と人から「チーンド」と云はれぬやう方の限り努力します。

不平不満はどし／＼解決し、捨て去つて、いつもサツパリと朗らかな氣持で居るやう
に致します。

映畫に行くも結構、カフェー等に遊びに行くもまた可？、眞からそれに依つて愉快に
なれるならば、明日の力の原動力となり良い事と思つて居ります。又反對に、これに
依つて不平、不満を増延し、道ならぬ事を好むやうな無智な、無批判な青年とならぬ
やう、充分に世の中の事を學び、互ひに相戒め合ひます。

外へも行かぬ、能く働きもしないでは、青年の延びる力を失つてしまふと思ひます。
愉快に遊び、必死に働く、こゝに眞理を得、且青年の行く道が自ら活然と、開けるも
のと確信して居ります。

右が現在の當青年部員の氣持であり、又行き方と考へて居ります。

今度こそ原稿を書かう。もう何とか纏めねば締切りに間に合はぬ……と店よりの歸路、暮れて間もなき、片われ月の冴えた淋しき田圃道を、歩きながら考へる。

扱て机に向つてみるが、どうして思ふ半分も書けぬ。仲々ベンが動いて呉れぬ。心の奥では、何とか書かなくては、早く……とあせるのだが、もう一つ別の心が出て

來て、其奴が邪魔して思ふ様に書かせて呉れぬ。さんざん惱んだ揚句、今度は原稿の事より全く離れて、邪魔する心を探究してみる。

彼か？、是か？、自己の心の中にありながら自身で自由に出來ぬ曲物。思ひ惑ふ。暫くする内に忽然と思ひ當る。そうだ、是だ!!、この憎い心の正体は自惚れの心なのだ。

是の自惚れの心が、書けど素直に命じてゐる、良心を邪魔するのだ。多少でも良い原稿を書き、人に讀まれる時自己を少しでも良く見せ様とする己惚れ、

自己にどの位の能力があるのか、自分の足りない能力等は、一度も半分だに顧みる事

なく、唯、自己を他人に良く思はれ様とする虚榮心、修養させて頂いてゐながら、何と云ふ情無い根情であらう。自分で自分が嫌になる。

是の心がある爲、總ての物事に苦しまされるのだ。否自ら求めて苦しんでゐるのだ。

先生をよく説かれる、貧、瞋、痴、人間の心の大敵である、病氣、災難の根源をなす所の是の三大魔、三大毒も皆、自惚れの心が土臺であると思ふ。

自分は本當に至らぬ人間也、と云ふ事をハツキリ認識してゐれば、慾も出ぬし、勿論怒りもせぬだらう。

先生の叫ばれる、「修養の眼目とは己を知る事だ!!」と仰言るのも此所だ。

自惚れを捨て去り、馬鹿になるのだ、馬鹿になり切る爲に修養させて頂くのだ。

馬鹿に近づけた時、初めて完璧な人間に近附いた時とも云へやう。

修養の雜誌にのせて頂くべく、原稿を書きながら、猶此の大敵に災される。

随分矛盾した様に思ふだらうが、御話を聴きながらも、實行に迄突込めぬ、意志の弱

い私の本當の叫びだ。
日々心の鏡に自巳の醜影を映し、少し宛でも反省し、そして馬鹿に近づく様努力しやう。

(以上)

(湘南部) 山本幸太郎

之は以前から私の氣付いてゐた事です、修養の体験を語られる人も、亦それを聽かれる人も、其の談話が病氣と結び付かぬと、何か物足りない様に感ぜられるらしく、これは大きな見當違ひである様に思はれます。

病時だけ修養を必要とするのでなく、平時から常に修養が必要なのでありまして、寧ろ後者の方に重点を置くべきだと思ひます。

病氣になつたからと云つて、急に心の入換へに焦躁するのは、却つて自我巧利の考へから出發したもので、眞の修養とは縁遠いかに思はれるものです。そして此の結果は、迷信に陥る危険性がある様に思はれます。

私は修養体験を語る人も、聽かれる人も最早病氣々々と云ふ事から、全く離れ去つてもよい時季ではないかと思考されます。

武田先生も斯る事柄を修養の眼目として、教へられてゐない筈だと思ひます。四百四病と云つて、誰にも必らず病氣はつきものです。之は反省すべき所の心の表はれであると思へます。

勿論病氣は、病氣らしくして醫藥を尊重するのは肝要ではありますが、余りこたはり過ぎるのは、苦であり、惱みの種であります。

苦を苦と思はず、本日を樂しむと思考させられ、過す一日一と時が、それが苦を越へて樂を掴む修養の道であると思考させられます。私も近頃此の氣持を「モットー」として、本日一日を過させて頂いて居りますが、朗らかが吞氣に變つて、一日の仕事も吞氣に成り勝ちになります。

之ではいけないと思へば、これもあれもと又取越苦勞が出初めます。之も一つの心の

持ち様だと思ひます、中席は得難く、日々の修養であり、一日か之でいゝんだと満足に過す事は充分に味へないと思ひます。

こゝに修養の價値があり、食事で云ふならば、腹八分目に醫者いらすの例へで、満足感を充分に得様とすれば、そこに慾が出て自ら身を壞して、明日の一日へ又大きな苦勞や考へを伴ひさせるものだと思ひます、ですから本日一日の務めが、どうやらこうやら此に終らせて頂けた、今日只今を喜んで働かして頂く氣持が、平時の修養であると思ひます。

千里の道も一歩からで、本日一日が一歩です。本日一日が無事に過させて頂ければ、それでよいのではないかと思ひます。本日一日が無事に過させて頂ければ、さすれば千里の道も、そう遠くは感じないと思ひます。

「心こそ心を惑はす身の仇」

「修養は理の理解より實行」

(以上)

(西部) 外狩 康 孝

「報恩會青年部員はすべて御世辭無しで修養しで行かうぞ」言はれて居りました。自分で御世辭無く眞實で暮してゐる積りでした。去る十一月の道場にての武田先生の御講演の中、家の畑の蕎麥を刈り取りそれを取り片付けてゐました時、傍を通つた二、三人の人は「よく出来ましたね」と云ひ、又見たわりに出来てゐませんですね」と手に取つて見て言葉掛けて通り過ぎる人もありました。「眞實その人等のありのまゝが分るものと、實際に於てはあまりよく出来ては居りませんでした」その時私がそこを通つたとしたら如何言つたかと自問自答して見ました。必らず「よく出来ませんでした」と云うと思ひました。武田先生でなく他の知人でしたら或は本當を云つたかも知れません。先生のよく言はれて居ります修養には御世辭無しで行かうと云はれます事が分つたやうな氣が致しました。このやうな些細な事に於てもこのやうな始末故に自分には氣づかずに修養の中には御世辭が多々ある事と思ひました。

今後暮す上にも眞實に親切に暮させて戴き度努力致そうと思つて居ります。

一 青年部員

「さんしよは小粒でピリ、と辛い」

機關誌「報恩」は小さい頁數は少い。活字だけ、文字だけを讀むのならば一時間も要らない、そんな讀み方をして戴き度く無いと思ふ。こんな讀み方をするのなら本屋の店頭に溢れて居る娯樂雜誌でも讀んだ方が爲になる。

活字の中に含まれて居る「魂」と言ふのか「心隨」といふか、汲めども盡きぬ奥底のものを体得しなければ駄目だ。この意味で大脇かなるさんの一文の中に「報恩」に眞實の道を教へられたと痛感された處があるが偉いものだと思ふ。斯ふ云ふ讀み方をしたら小冊子「報恩」が何れ程、万巻の書に勝るか計り知れない。要は讀む人の心構への問題である。

(青年副部長) 塩田堅二

昭和二十年八月十五日以來私等の祖國は百八十度の大轉換をしたのであります。敗戦以來世の中は混沌たる渦中に投入したのです。社會狀態の無秩序の中にあつて私達は大暴風雨の大海に浮ぶ小舟の如く揉みに揉まれてなす事を知らずの有様でありました。父母が修養し其の雰圍氣の中に生活した私、武田先生の御講演を直接、間接に拜聽して居る私、數度の尊い體驗を戴きし私であり乍ら此の渦中からどうしても脱却することが出来ませんでした。此は私一人では無いと思ひます。

私は今迄あまり御話の數も承つて居ない、何も解らない、然し私等は先生の御話を日々の生活の中に生かす事が青年として進むべき心の大道である事と確信し、武田先生の御話の中に飛び込んで明るく働かせて戴く事が生きる道であると云ふ信念を持つたのです。

私等は若いのです。小林法運先生以來の武田彌三先生の御話を、御理想を、御信念を只私等だけの一條の光明として満足し自分だけが其の中に生きることのみに幸福を

見出して居てはなりません。明治維新は二十才……三十才前後の青年の手に依つて、あの大業が出来たのであります。良き御話の中に、良き心の先生を、良き諸先輩を私等は幸福者です。私等は一秒一刻を心して新日本建設の爲に。

(終り)

人のよし富士の初雪の一入に

朝不二や背黒せきれい舞の上がり

十五夜は惜しまれながら明けにけり

鍬取る手やすめて眺める富士の山

枯れむくらかたへに釣の位置定め

白富士を仰ぎて吾の氣さやか

露しげし朝のニユースの透きとほり

水引のそのはしけやし人に知る

中根

小原

松山

松山

小原

松山

小原

中根

吐く息のやうやう白う人の連れ

立冬に茄子は未だ花つけて

風のまま流れのまゝに枯すゝき

秋霖が止みて今朝の木葉哉

中根

外狩

外狩

外狩

秘書長が二尺に余る大鯉をものされたとか聞いてゐる加納川畔、晩秋早曉、富士の遠頃の雪白く、小原宗匠の發意に依り吟行を試みたる結果である。

秘書長これら成果を一瞥されるや筆とりて、巧みに之を評され一言あり。之を左に

掲げて諸賢に披露す。

尾張つべやつとこたまに富士おがみ

吟むも吟んだり下手の十七

武田先生以上すべてを小原部長より聞知され意味ある笑みを洩らされしとか(中根)

修養 コント

(西 部) 石 濱 智 子



一、むつ き
修養は、自分の姿が自分で見えるやうになることだ。私は昭和十四年七月から武田先生のお話をきかせて戴くやうになりましたが、今度門弟として道場で修養するやうにこのことでも十一月十六日から四日間修養させていただきました。出掛ける途中に汽車事故の爲に一日間延着致して申譯ありません。私は今まで先生のお話を「病氣しない爲めお話」言ひかえれば病氣なおしのお話としてきいてまいりましたが今度はじめて私たちが「正しい日本人になる」ためのお話であるといふことに氣づかせていただきました。その上にいつも始めお聞きするつもりでなくてはならないといふことを知りました。

私は先生のお話を聞きはじめたその最初に人間は「すなお」でなくてはならないと心に決めたことでした。その意味で今年六才になる長男に慇懃と名づけ「すなおであれ」と念じ、それとともに私たちも一生すなおでありたいとわざ／＼すなおと言字を字引からぬきだしたほどでした。それなのに十六日の夕方でしたが一緒に修養させていたゞきにいらつしすつた今津さんから「むつきはしまいなさつたか」と注意していただきましたのにいゝえしませせん、家ではいつも夜干しましたゞすが赤ん坊は夜泣などしません、あれは迷信ではないですか」と申してすましてゐましたところ夜中から十七日に掛けて雨が降りだしました。朝目ざめておどろき「あゝしまつた、あの時すなおに取り込めばよろしかつたものに」と悔いて見ても無益のこと、旅先でかざられたおむつでやりくりしなければならぬ自分が雨に會つてどうにもならないくさるしは骨身にしみこたへました。すなおと言ふ名まで子供につけたくらいなのに自分ですなおでないためこうした御意見をいたゞいたのに違いないと自頃日常をふり返りながら本當に申しわけなく思つたことでした。

二、汽車の中

修養道場にいるあいだが修養であとは野となれ山となれではいけないと最後の日に後藤先生から御注意していたゞきました。

武田先生は立ちまわかう人の姿が鏡なりとおつしやいます。

汽車が沼津驛を發車して間もございませんでした。超満員の列車中で一人の女の方（年頃は二十五六歳で大變おきれいな方でした）が座席のうゑに立つて網だなの荷物を整理し初めました。その奥の方の網だなには男の方が二人おていました。なるほどうわさには聞いていましたものゝ見るのは今度が初めてのこととて唯あきれるより外はありませんでした。

その反對側の柵にも五六歳の男の兒づれの男の方が二人おてゐる。あつけにとられていると先刻網だなをかたづけしていた女の方が颯つと見事に網だなに腰を掛けました。さあ大變でした、おちらからももちらからも口ぐちに野次が飛び出しました。し

かも女の方はいたつて平然としておいででした。

その時でした、これが私への御意見のだ。私は人前ではおとなしそうにしているが、あれくらいのごときはやりかねない女です。女は女らしくしなさいと口で云つたくらいではわからない者には實際に自分の姿を見せつけねばのみ込めまいと大勢の人にさげすまされながら實演して見せて下さる彼の女は御親切なお方です。ありがとうございますと彼の女を心から感謝の氣持でふしおがみました。

三、出ベソ

私は出ベソをあまり好みません。お風呂で他所の赤ちやんが出ベソを出してゐるのを見るにござうしてあゝなるのかしらん、お産婆さんが悪いのか知らん、遺傳なのか知らんと考え今度一度先生に出ベソはごういふ心のまちがいが表はれるのですかとお尋ねするつもりでいましたところ出ベソでなかつた私の赤ちやんが第二日目頭に突然出ベソになつてしまいました。

さあ大變病氣の人でも道場へきて先生のお話によつて反省してなおりなされるのに出
 ベツでもない子供をつれてきて出ベツにしてみました。主人に子供に何とわびようと
 申し譯ないことをしてしまつた。家の敷居をどうしてまたごう、どつおいつ考えたす
 え先生にお尋ねしたところお前は道場へ何しに來た、子守にきたのか修養にきたの
 か、わざ／＼金をつかつて子守りによこしたのではないんだよ、お前の主人はお前よ
 りえらいんだよとおつしやつて戴きました、本當にそつです私はなんとお馬鹿さんで
 せう常々私はもう何年も先生のお話をきいてゐるがお父さんはまだ日が浅いから何も
 解らないのだと思つてまいりましたが歳を重ねたことが尊いのではなく實行すること
 が尊いのだ。一度きいて實行する人がえらい人なのだ、私のやうに長くきかせていた
 だいていても實行しなければ何にもわかつていないと一緒です、やつとそのことをわ
 からせていただきました、ゆるされる日までわびとほすつもりであります。

(了)



私の診療室

(其の四)

名譽顧問 高須七郎治

日本の國民は夫婦關係を結ぶに際して重大な使命と義務を充分に自
 覺しなければならぬ、人間には四苦八苦といふことがあります、

四苦とは生きる苦しみ老いの苦しみ病の苦しみ死の苦しみで、これに

愛別離苦(親愛する者と離別する苦しみ)怨憎會苦(怨憎あるものと

會ふ苦しみ)求不得苦(求めて得ざる苦しみ)五蘊盛苦(生存の苦しみ、或は性のく

るしみ)を加へて八苦といふそれは人間生存する上において免れることの出來ないく

るしみである小林先生は調和奮闘無我といふことを説いて居らるゝのです。夫夫婦は
 精神的に調和し肉体的に努力奮闘して自我をなくして世のため國のために盡すべきで

ある、男女が夫婦となつて夫婦の交りをなすにも之れの状態を以つてなり子供を産む

にしても以上の心持であれば決して妊娠中は勿論産れた子供に悪い反映が残らないものですが之れに反した場合又は之れに捉はれた時は妻に夫に胎児の身体に悪い影響を及ぼすのであります。

一例

患者 ○呂○○○ 女 四十歳

現症 肺浸潤 子宮内膜炎 子宮腹膜炎にて永らく床につき十一月上旬なれど足袋をつけ湯たんぽを供用して居り所謂ちり貧といふ形容の言葉を現した病状がある

療法 主治醫の命に従ひ服薬は勿論營養分の攝取を充分に取り心の安靜を計ることにて工夫努力する様に説得す

反省 心の安靜を計ると云ふことは修養です、女の道を妻の道を歩むことです特に貴殿は、武田先生の教を受けて居らるゝ方です、温い心を持つて居れば富んだ

心がすれば湯たんぽは不必要です、修養を身につけて居られない御方であると私は湯たんぽを見て思ひました、夜も晝も床の中にあつて何の修養をして居らるゝのか聞かして下さい、と私が尋ねれば。

患者 感謝と夜の交りであります、一つは何分病中ですから。

醫師 何分病中ですからといふのは現代の誤つた常識から考へればそれで立派な答へかも知れませんが、修養といふ面からは自我が捨てきれない言葉です。

私はもう一步すゝめて自分の肉体を共に捧げきるといふ点にまづ持つて行くのです今夜は是非實行して下さい、と其の他いろ／＼私の体験を語り別室に去り主人の身体検査で四十代の若さで血圧が一七〇普通の人より四〇も高いことが發見されたのです、醫學的の立場で語り病人宅で宿をしていたきました、翌朝主人が自修たつぷりニコ／＼元氣で先生血壓を計つて下さい、との申し出で早速血壓を計れば一三〇です一夜にしての變化です、普通の健康体の人の血壓

です、私は主人に向つて之れが求めずして得る即ち不求自得といふことですと説明し奥様の病床に私は伺ひ女の役目を果して偉かつたですね、あなたの心持であなたの主人への捧げた努力は今朝血脈が下り頭が軽くなつて元氣に御國の爲めに働くことが出来ましたと御話すれば。

患者 御蔭様で私も今朝は身体がかるくて氣分がよろしいです有り難う存じましたよわかりました實行させていただきます。

醫師 御實行下さいまして武田先生の御教へが生きてくるのです聞いたことは實行しなさい。夫婦の愛で結ばれるものであるその愛は自然に生ずるものではありません、愛は二人が互に努力をして捧げあつて出来るものだと思います、そして男と女との區別されたる二つのものの同一の感謝で抱擁されたものであると思ひます、朝食を終へて御夫婦の日本晴れのした希望にみちた言葉を受け門まで見送りを受けて辭去しました。

二例

患者 上〇〇〇 女 二十才

現症 三人目の妊娠 八ヶ月 二日前より子宮出血助産婦には醫師の應援を求めたれど依然出血、醫師は子宮出血甚しければ人工摘出之れが爲めには母体の腹部切開の大仕事をなさなければならぬとのこと、三日目に私の往診となつたのであります。

療法 矢張前醫の如く前置胎盤より來れる子宮出血、絶對安靜内服止血注射の醫學的方面の方法をなす、他に武田先生より教へられたる、肝門より局部、腹部の温巻法をなすこと指導す。

反省 私の不心得を御開かせ下さい。

醫師 三日前の夫婦關係の妻としての其の時の心境は如何でしたか。

患者 ハイ、答なし。

醫師 私が申しませう、あなたは妊娠八ヶ月女の役目を目下果しつゝあるのに此の上の役目は御免だといふ御心持でせう。

患者 ハイ、そうです。

夫 正座して下を向いて赤い顔。

醫師 私の妻の体験を申しませう妻が妊娠して明日分娩だと思ひますと其の夜は夫婦關係を結ぶのです、必ず安産です理論で之れは解決出来ません体験です、説明するより外にありません、之れ程貴い神聖な事柄はありませぬ妊娠中でありまして夫婦はバラ／＼であつてはなりません、夫婦は一体であります自分の都合を計る可きではない常に夫婦は調和奮闘無我であり、又夫婦關係となりまして調和して奮闘して無我で行かなければなりません、一年生から出發しなさい。一週間後一里の小生宅まで妻を自轉車に乗せて元氣な顔で此の通り立派な身体になりました、今後シツカリ夫婦の道を守らせていただきますと報告に來ていただいたのであります。



編輯 後記

○「報思」第四冊目を年忘れ號として諸兄に贈る。
一切のけがれを取つて新憲法實踐の年にスタートしよう。

○報恩會青年部は試運轉列車である、雜誌にしる討論會にしる若い者の熱と力で前進をさせたい。試運轉である以上失敗もあるが其の中に大きな發見發明が見出されると思ふ。

○討論會（若き惱み相談會）は毎回満員の盛況であるいくら増へてもあへて辭せず本部道場の畔を流れる狩野川の川原で晴天車座になつてでも大いにガンバロウ、又快ならずや。

○青年部報の決議録は實行第一をモットーとする若き集ひが熱と眞心で完成した記録である、全會員の熟讀及び生活の中にあらわして實行して頂きたい。

○今回始めて質問文（青年の聲に掲載）が投稿されました。遠隔の地の會員諸兄は舉

つて此の欄を御利用下さい。急を要するお答は別に便にても差上げます。

○新入會員諸兄の熱心なる御投稿の多きを感謝すると同時に昔からの同志の御投稿の少なきは如何。舊体依然と解されやすい。

○「私の診療室」は總て九死に一生を得られた貴重なる記録であるとの事。醫は仁術なり、病時には醫藥を尊重す、なま療法は大怪我の源、併せて心の修養が肝要である。

○十二月四日の午後、所用ありて三河に至り本誌の印刷を御願ひしてある富田印刷所に立寄り印刷の進捗状況を御伺ひした處「即ち校正を完了した」とのこと、意外も意外、其の仕事の早いことに一驚したが、御主人始め家中の方々が報恩の一端にもと思つて、毎日夜中の一時、二時迄も頑張つて御努力には敬服の外はない、編輯部として文句無しに頭を下げて仕舞つた次第です。

(河合生)

報恩會青年部規約

- 第一條 名譽ハ報恩會青年部トシテ
- 第二條 武田先生ヲ中心トスル修養ニ依リ心身ヲ練磨シ會員相互ノ親睦ヲ廣ルヲ以テ目的トス
- 第三條 會員ハ第二條ノ目的ニ賛同スル青年ヲ以テ正會員トシ特ニ有志ヲ以テ賛助會員トス
- 第四條 機關誌「報恩」ヲ毎月一回發行シ會員ニ無料配布ス
- 第五條 會費ハ一ヶ月參圓也トシ、一ヶ年前納者ハ金壹拾六圓也トス
- 第六條 (但シ徴收済會費ハ返濟セズ)

本會ニ在リ役員ヲ選キ任期ハ三ヶ年トシ重任ヲ妨グズ

部長一名 副部長二名 會計一名 幹事若干名 以上

附則

事務一切ハ當分ノ御愛知縣中島郡朝日村玉野一三九九番 寺田元徳工場方ニ號ス

昭和廿一年一月廿五日印刷
昭和廿一年十二月一日發行

【非賣品】

(毎月一回發行)

各、愛知縣中島郡朝日村玉野一丁目五八番地

編輯部 小原孝正 發行人

愛知縣中島郡西尾町大給七八

印刷部 富田政七 印刷人

愛知縣幡豆郡西尾町大給七八

印刷部 ヤママサ印刷所 印刷所

「報恩」發行所

報恩會青年部

◎青年部討論會御通知

日時 毎月九日 自午後一時

場所 報恩會本部 講演室

(沼津市黒瀬町五十一番地)

出席者 報恩會青年部員に限る

(當日は武田彌三先生の

御陪席を頂きます)

議案は前以て本部宛御提出を乞ふ
各支部より二名以上の代表者の出
席を望む

報恩會青年部

◎原稿募集

一、各支部質疑應答集

一、青年の聲

一、修養質問文

一、青年部員文藝作品

1、小品文

2、詩、短歌、俳句等

(原稿は編て楷書のこと)

締切日 毎月十五日

投稿先

名古屋市熱田區横田町一丁目五十八番地

小原孝正宛